

幕末期沿岸部における死亡構造の比較研究

—和歌山藩領と広島藩領を事例として—

池 本 裕 行
杉 山 聖 子
阿 部 英 樹

要旨

本稿の課題は、和歌山藩領と広島藩領を事例に、幕末期沿岸部における死亡構造（死亡者の性別・年齢別・月別分布）の比較分析を行うことで、その地域差を明らかにし、それらを生み出す諸要因について考察することである。

分析の結果、和歌山藩領と広島藩領で平常年に成人男性死亡者が8・9月に増加する点などが共通していたことが明らかになった。これは海に関わる生業に携わる村々に共通する固有の特質として指摘できる。一方で、死亡クライシスの発生には差があり、その回数は和歌山藩領より広島藩領の方が多かった。この要因について、仮説的に隣接・周辺地域への移動・接触機会の濃度の差ではないかと解釈した。

1. はじめに

1) 課題と意義

本稿は、和歌山藩領と広島藩領を事例として、幕末期沿岸部における死亡構造（死亡者の性別・年齢別・月別分布）の比較分析を行う。主な課題は、死亡構造の地域差を明らかにし、それらを生み出す諸要因についての考察を進めることである。

江戸後期には、伝染病や凶作等によって大量死亡が何年かおきに発生した。とりわけ幕末期から明治初年にかけては、コレラ等の影響もあり、死亡者の急増傾向が顕著であった。しかし、同時期に限らず、江戸期における死亡者の動向や大量死亡の実態については、具体的な史料分析に取り組んだ研究が少なく、必ずしも明らかになっていない。歴史人口学は、大量死亡を死亡クライシスと捉えることによって研究を進展させた

が¹、江戸期における死亡者の動向や大量死亡＝死亡クライシスの実態について発表された事例は、依然として限られている。

筆者達は、こうした研究状況をふまえて、寺院過去帳の死亡者情報を基礎史料に、広島藩領、庄内藩領、和歌山藩領での事例分析を積み重ねてきた²。本稿では、その蓄積を前提に、死亡構造の地域間比較を試みることにした。

本稿の意義として、次の2点を強調したい。第1に、和歌山藩領と広島藩領の死亡構造を比較することで、死亡者の動向や死亡クライシスの実態に見られた地域差を明確にすることである。地域差の存在は先行研究によって、江戸期の死亡実態における最大の特質として指摘されてきた。これには東北や関東といった広い領域間における地域差と、同一の藩領内、同一の郡内といった狭い領域間における地域差の両方が含まれるが、いずれについても分析事例が少なく、具体的実態には不明な部分が多い。本稿では広い領域間における地域差の実態、すなわち全国レベルでの地域差を取り上げる。和歌山藩領と広島藩領との比較分析に際しては、村落状況が似た村々を選び、基礎史料、対象期間、分析方法をそろえることで、地域差の実態がより明確にできると考えた。

第2に、沿岸部を分析対象とすることである。本稿でいう沿岸部とは、海に面するという地理的条件にくわえて、漁業や海運業など海に関連する産業に大きく依存しているという経済的条件を有する村々である。江戸期の死亡実態を取り上げた先行研究の大部分は、農業中心の村々を分析対象としており、こうした村々は対象とされることが少ない³。当該地域の人々が従事する生業が異なれば、それに伴って死亡実態もまた異なってくると考えられよう。本稿では同一の地理的・経済的条件を有する沿岸部を対象に、死亡構造の地域間比較を行う。それによって、海に関わる生業に携わる村々の死亡実態に共通する固有の特質を明らかにできるのではないだろうか。

2) 対象地域の特質

本稿では、和歌山藩領として紀伊国名草郡冷水浦、海部郡塩津浦、大崎浦（現和歌山県海南市）⁴、広島藩領として安芸国賀茂郡阿賀村（現広島県呉市）を対象地域とする。なお、和歌山藩領は上記の順に北から並び、冷水浦と塩津浦は隣接する一方、塩津浦と大崎浦の間には1ヶ村を挟む。

まず戸数・人口と村高を確認する。和歌山藩領は3ヶ浦合計で文化期に747戸、2,521人⁵、明治6年（1873）に735戸、凡そ2,889人⁶であり、村高は634,355石⁷であった。広島藩領は文政2年（1819）に959戸、4,921人であり、村高は889,981石であった⁸。なお、

本稿の分析対象期間である安政元年（1854）～慶応3年（1867）における戸数・人口の推移はいずれの地域も明らかにできないが、ほぼ停滞していたと仮定しておきたい。

次に対象地域の特質として、当該地域に居住する人々の経済的な分化状況を明らかにしたい。具体的には労働力を販売することで生活を維持・補完していた雑業層の分厚さやその生業の性格に注目する。これらはいずれも死亡構造に影響を与えると考えられるためである。

まず和歌山藩領について、船の所持者数を確認する。塩津浦の明治4年（1871）と推定される「就御調奉達上候」⁹や大崎浦の各年の「船数改帳」¹⁰によると、江戸後期の両浦では約7割が船を所持していなかったことがわかる。そして、塩津浦の寛政6年（1794）「乍恐奉願上口上」に「他所船少々つゝ入津仕候付、船宿小店船持又ハ小前末々ニ至迄、右船々乃余情ヲ以渡世仕候」、同9年（1797）「乍恐追而奉願上候」に「大かたハ船手之稼き并男女とも商ひ手仕事ニて渡世仕り申候」とあることから¹¹、彼らは網の引子や入津する船に関わる小商いによって生活したと考えられる。

和歌山藩領は漁港と商港の性格を併せ持ち、自らの船で漁業・廻船業を営む者も存在したが、約7割は船を所持せず、漁業や廻船業に関わる生業によって生計を立てた。

つづいて広島藩領について、文政2年（1819）「阿賀村国郡志御用書上帳」から明らかにしたい。同史料から職業ごとの内訳を見ると、全体に占める割合が多い順に百姓（57.0%、547戸）、浮過（23.6%、226戸）、漁家（16.8%、161戸）、職人（1.8%、17戸）、出家（0.3%、3戸）、医者（0.3%、3戸）、社人（0.2%、2戸）となる。また、当該地域は家数に比して田畑が少ないため、「農余浮儲之業」として「山稼」や「漁網すき」が行われていた。さらに「農業を主とせず別産業之者」について「漁師百九拾六軒并浮過之内預り作仕候もの之外百五六拾軒農業不仕、漁師者魚漁而已、浮過ものハ小商ひ日雇船頭加子等ニ被雇、妻子ハ漁網をすき出し其賃を得渡世仕申候」とも記されている。文中の「浮過」とは、所持地を全く持たない無高層（日雇・雑業層）のことである。

広島藩領も漁港と商港の性格を併せ持っており、漁師など海に関係した生業に従事する村人や小商をしたり、日雇・船頭・加子などに雇われたりする浮過が多く存在した。

以上から、対象地域の特質として次の2点を強調したい。第1に和歌山藩領と広島藩領は共に地域居住者の経済的な分化が進み、雑業層が地域内の多数を占める点で共通していたこと、第2に両地域の雑業層は漁業・廻船業など海に関連する生業に携わっていたことである。

3) 基礎史料

本稿では基礎史料として寺院過去帳を利用する。過去帳とは、寺院の住職によって書き継がれた死亡者の登録簿であり、戒名や俗名、性別、死亡年月日、年齢などの死亡者情報を得ることができる。利用する過去帳を以下に示す。

和歌山藩領では冷水浦 A 寺、塩津浦 B 寺、大崎浦 C 寺の過去帳を利用する¹²。これらに安政元年（1854）から慶応 3 年（1867）の死亡者は 852 人記載されている。なお、当該地域の死亡実態を分析するため、他所で死亡した者・他所者・死亡年不明者等は除外している。その全てについて、死亡年月日、性別の情報を得ることができ、年齢については死亡年齢や戒名から 15 歳以上と 15 歳未満に区分できる。3ヶ寺とも檀家人口や檀家数の正確な推移を明らかにすることはできないが、冷水浦は浦内のほぼ全て、塩津浦は約 6 割、大崎浦は約半分が各寺の檀家であった。

広島藩領では阿賀村 D 寺の過去帳を利用する¹³。杉山（2015）では、同過去帳にもとづき、安政元年（1854）から明治 5 年（1872）まで総計 1,549 人について、広島藩領の同一郡内の内陸部との比較分析を行った。本稿では、和歌山藩領と分析期間をあわせて、安政元年（1854）から慶応 3 年（1867）の死亡者 1,127 人を取り上げた。ここでも他所で死亡した者等は除外している。死亡者情報については、その全てについて死亡年月日、性別の情報を得ることができる。また死亡年齢の記載がないため、死亡者の続柄から 15 歳以上と 15 歳未満に区分した¹⁴。D 寺についても正確な檀家人口は判明しないが、檀家数については、安永 3 年（1774）前後は 200 軒余で推移し、明治初年にかけてほとんど増減はなかったようである。そして、檀家のほとんどが同村の住民で占められていた。

2. 死亡動向

本章では分析対象期間とする安政元年（1854）～慶応 3 年（1867）における死亡者の動向を確認する。和歌山藩領と広島藩領における死亡者の年次別推移を示したのが図 1 である。同図から 2 点注目したい。

第 1 に、和歌山藩領においても広島藩領においても、数年間隔で死亡者の急増が繰り返され、しかも多くの場合それはもっぱら 15 歳未満の年少層の死亡者の増加によって引き起こされていることである。こうした「死亡数の鋸歯状の大きな変動」¹⁵や高い乳幼児死亡率は、江戸期の死亡傾向に共通する特徴としてしばしば先行研究でも指摘されてきた。

第 2 に、和歌山藩領と広島藩領では死亡者が増加する年次が必ずしも一致しないこと

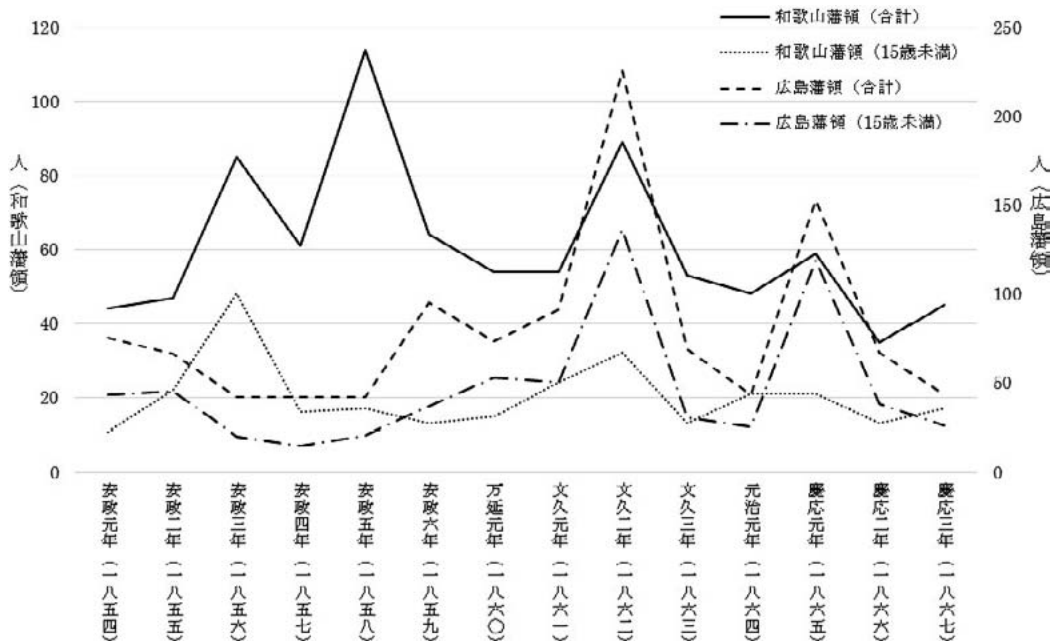


図-1 死亡者数の推移

である。文久2年(1862)はどちらも死亡者が増加する一方で、安政5年(1858)は和歌山藩領、慶応元年(1865)は広島藩領で死亡者が増加した。

次に死亡者の実数に代えて死亡者指数という指標を採用して分析を深めていきたい¹⁶。死亡者指数とは、各年次の死亡者数を平均死亡者数で除した数値で、これによって平常な死亡者数を基準として異常な死亡者数の増加を確定できる。本稿では死亡者指数が1.50以上を高死亡年(死亡クライシス年)、1.20以上1.50未満を中死亡年、1.20未満を平常年と区分する。平均死亡者数は和歌山藩領が60.9人、広島藩領が80.5人なので、これを基に各年次の死亡者指数を算出すると、和歌山藩領は高死亡年が1年、中死亡年が2年、平常年が11年、広島藩領は順に2年、0年、12年となる。これを死亡者指数が高い順に整理したのが表-1である。同表から、2点注目したい。

第1に、死亡クライシスの発生には差があり、その回数は広島藩領の方が和歌山藩領より多かったことである。広島藩領では2回であったのに対し、和歌山藩領では1回にとどまった。

第2に、死亡クライシスにおける死亡者数の増加率にも差があり、その死亡者指数は広島藩領の方が和歌山藩領より高かったことである。和歌山藩領で唯一の死亡クライシスであった安政5年(1858)の死亡者指数が1.87であったのに対し、広島藩領では文久

表－ 1 死亡者数と死亡者指数

	和歌山藩領			広島藩領		
	和暦（西暦）	人	死亡者指数	和暦（西暦）	人	死亡者指数
高死亡年	安政 5 年（1858）	114	1.87	文久 2 年（1862）	226	2.81
				慶応元年（1865）	153	1.90
中死亡年	文久 2 年（1862）	89	1.46			
	安政 3 年（1856）	85	1.40			
平常年	安政 6 年（1859）	64	1.05	安政 6 年（1859）	95	1.18
	安政 4 年（1857）	61	1.00	文久元年（1861）	91	1.13
	慶応元年（1865）	59	0.97	安政元年（1854）	75	0.93
	万延元年（1860）	54	0.89	万延元年（1860）	73	0.91
	文久元年（1861）	54	0.89	文久 3 年（1863）	69	0.86
	文久 3 年（1863）	53	0.87	慶応 2 年（1866）	67	0.83
	元治元年（1864）	48	0.79	安政 2 年（1855）	66	0.82
	安政 2 年（1855）	47	0.77	元治元年（1864）	43	0.53
	慶応 3 年（1867）	45	0.74	慶応 3 年（1867）	43	0.53
	安政元年（1854）	44	0.72	安政 3 年（1856）	42	0.52
	慶応 2 年（1866）	35	0.57	安政 4 年（1857）	42	0.52
			安政 5 年（1858）	42	0.52	
年平均死亡者数（人）	60.9			80.5		

2 年（1862）が2.81、慶応元年（1865）が1.90であった。広島藩領における死亡クライシスの死亡者指数は2ヶ年とも和歌山藩領の死亡クライシスを上回っていた。

これらの点から、広島藩領の方が和歌山藩領より死亡クライシス＝大量死亡が発生するリスクが高かったと考えられることを強調しておきたい。

3. 平常年の死亡構造

1) 和歌山藩領の平常年

本章では和歌山藩領、広島藩領の順に平常年の死亡構造を明らかにしたい。これは、死亡クライシスの発生時には平常年と異なる特徴的な死亡傾向が見られると言われており、先行研究でも両者は区別して分析されるためである。

和歌山藩領について、その年齢別分布を示したのが表－ 2 である。次章で取り上げる高死亡年も併せて表示した。同表から2点注目したい。

第1に、15歳未満の年少層が死亡者全体に占める割合が約3割であったことである。年少層と15歳以上の成人男性、成人女性が約3割ずつを占めていた。

第2に、成人層では男女差がほとんどなかったことである。成人層の男女比を見ると、男性49.2%（183人）に対して女性50.8%（189人）であった。

つづいて死亡発生の季節変動、つまり死亡の季節性を分析したい。江戸期の庶民の死亡年月日（命日）を明らかにできる史料としては、寺院過去帳のほかに宗門改帳などが

表－２ 和歌山藩領における死亡者の性別・年齢別分布

		15歳未満	15歳以上		合計
			男性	女性	
平 常 年	人	186	183	189	558
	%	33.3	32.8	33.9	100.0
高死亡年 安政5年 (1858)	人	17	57	40	114
	%	14.9	50.0	35.1	100.0

注：割合については、四捨五入により小数第1位までとした。そのため、内数の和は必ずしも合計とは一致しない。

ある。しかし、過去帳で命日は必須の記載項目であったのに対し、宗門改帳は命日を記載しない場合も多かった。そのため、死亡の季節性の分析は過去帳の利点を最も活かすことができるものといえる。ただ、公開上の厳しい制約などもあり、死亡の季節性に関する研究報告としては鬼頭（1998）、同（2000）が目立つだけである。

なお、鬼頭のこれらの研究は、20世紀初頭以降を対象に死亡の季節性の時系列的変遷を分析した初山（1971）の季節区分、すなわち新暦の1～3月を冬季、4～6月を春季、7～9月を夏季、10～12月を秋季とする区分を踏襲して分析を行っている。本稿もこれに倣い、旧暦の12～2月を冬季、3～5月を春季、6～8月を夏季、9～11月を秋季として分析を進めていく¹⁷。

和歌山藩領について、その月別分布を示したのが表－3である。死亡年月日は旧暦のままであり、閏月は基本的に除外している¹⁸。同表から、大きく2点注目したい。

表－3 和歌山藩領における平常年死亡者の月別分布

	15歳未満		15歳以上				合計	
			男性		女性			
	人	%	人	%	人	%	人	%
1月	22	12.0	15	8.3	17	9.2	54	9.7
2月	16	8.7	10	5.5	11	6.0	37	6.7
3月	12	6.5	9	5.0	9	4.9	30	5.4
4月	16	8.7	9	5.0	23	12.5	48	8.6
5月	12	6.5	19	10.5	19	10.3	50	9.0
6月	16	8.7	13	7.2	22	12.0	53	9.5
7月	18	9.8	19	10.5	17	9.2	55	9.9
8月	14	7.6	30	16.6	20	10.9	66	11.9
9月	14	7.6	20	11.0	11	6.0	45	8.1
10月	8	4.3	14	7.7	7	3.8	29	5.2
11月	14	7.6	15	8.3	16	8.7	46	8.3
12月	22	12.0	8	4.4	12	6.5	42	7.6
合計	184	100.0	181	100.0	184	100.0	555	100.0

注：割合については、四捨五入により小数第1位までとした。そのため、内数の和は必ずしも合計とは一致しない。

第1に、死亡者の山が夏季に形成されたことである。合計の死亡者は1月、4～8月に平均を超え、年間死亡者の21.8%を占める7・8月に死亡者の山が形成された。1月にも死亡者は増加したが、大きな傾向としては夏季集中型ととらえられよう。性別・年齢別に見ると、7月は全階層、8月は成人層が増加しているが、月別に死亡者の実数に注目すると7月は各階層が占める割合が平常年全体と大きくは変わらない一方で、8月は成人男性が同月の死亡者の45.5%を占めており、その影響が大きかったことがわかる。

第2に、死亡者が晩冬から初春に最少となったことである。2・3月の死亡者は年間死亡者の12.1%にとどまった。性別・年齢別に見ると、2月は成人層、3月は全階層で死亡者が減少したが、死亡者の実数に注目すると両月とも成人層の影響が大きかったことがわかる。

このように死亡の季節性は、全階層が一律に増減して形成されたわけではなく、各階層が個別に異なる動きをしたものが重なった結果形成されたものであった。そこで次に年齢・性別ごとに月別分布を見ていきたい。

15歳未満の年少層は1・2月、4月、6・7月、12月に平均を超えたが、年間死亡者の24.0%を占める12・1月に死亡者の大きな山、18.5%を占める6・7月に小さな山が形成された。冬季と夏季という2つの死亡者の山が形成される2山型ととらえられる。その一方で、9～11月に死亡者は最少となった。

15歳以上の成人男性は5月、7～9月に平均を超えたが、8・9月にとくに増加し、年間死亡者の27.6%を占めた。晩春から初秋まで死亡者が増加傾向にあったが、とくに晩夏から初秋に増加したといえる。そして、3・4月に10.0%と死亡者は最少となった。

成人女性は1月、4～8月、11月に平均を超えたが、年間死亡者の22.8%を占める4・5月にとくに増加した。1月や11月にも死亡者は増加したが、年間を通して見れば春季から初夏に増加したと判断される。また年少層と同じく、9・10月に9.8%と死亡者は最少となった。

年齢別・月別分布の諸点を明らかにしてきたが、和歌山藩領の平常年の死亡構造として、年少層が死亡者全体の約3割であったこと、夏季に死亡者の山が形成される夏季集中型であったことを強調したい。

2) 広島藩領の平常年

次に広島藩領について、平常年の死亡構造を明らかにする。

その年齢別分布を示したのが表-4である。和歌山藩領と同様に、次章で取り上げる

表－４ 広島藩領における死亡者の性別・年齢別分布

		15歳以上	15歳未満		合計	
			男性	女性		
平 常 年	人	403	181	164	748	
	%	53.9	24.2	21.9	100	
高死亡年	文久2年 (1862)	人	136	39	51	226
		%	60.2	17.3	22.6	100
	慶応元年 (1865)	人	119	12	22	153
		%	77.8	7.8	14.4	100.0

注：割合については、四捨五入により小数第1位までとした。そのため、内数の和は必ずしも合計とは一致しない。

高死亡年も併せて表示した。同表から2点注目したい。

第1に、15歳未満の年少層が死亡者全体に占める割合が高かったことである。年少層は全体の53.9%を占めていた。

第2に、15歳以上の成人層では男性の占める割合がやや高かったことである。成人層について男女比を見ると、男性52.5%（181人）に対して女性47.5%（164人）と男性の占める割合がわずかながら高かった。

つづいて、月別分布を示したのが表－5である。前節と同様に死亡年月日は旧暦のままであり、閏月は除外している。同表から、大きく2点注目したい。

第1に、死亡者の山が冬季に形成されたことである。合計の死亡者は1月、3月、7月、12月に平均を超えたが、年間死亡者の25.4%を占める12・1月に死亡者の山が形成

表－5 広島藩領における平常年死亡者の月別分布

	15歳未満		15歳以上				合計	
			男性		女性			
	人	%	人	%	人	%	人	%
1月	88	22.1	10	5.5	16	10.0	114	15.4
2月	21	5.3	15	8.3	11	6.9	47	6.4
3月	33	8.3	19	10.5	20	12.5	72	9.7
4月	31	7.8	11	6.1	14	8.8	56	7.6
5月	18	4.5	17	9.4	13	8.1	48	6.5
6月	22	5.5	26	14.4	11	6.9	59	8.0
7月	35	8.8	15	8.3	16	10.0	66	8.9
8月	26	6.5	17	9.4	15	9.4	58	7.8
9月	21	5.3	21	11.6	9	5.6	51	6.9
10月	26	6.5	9	5.0	14	8.8	49	6.6
11月	30	7.5	10	5.5	5	3.1	45	6.1
12月	47	11.8	11	6.1	16	10.0	74	10.0
合計	398	100.0	181	100.0	160	100.0	739	100.0

注：割合については、四捨五入により小数第1位までとした。そのため、内数の和は必ずしも合計とは一致しない。

された。3月や7月にも死亡者は増加したが、大きな傾向としては冬季集中型ととらえられよう。性別・年齢別に見ると、12月も1月も年少層と成人女性が増加しているが、月別に死亡者の実数に注目すると、12月は年少層が同月の死亡者の63.5%、1月は77.2%を占めており、その影響が大きかったことがわかる。

第2に、死亡者が秋季に最少となったことである。10・11月の死亡者は年間死亡者の12.7%にとどまった。性別・年齢別に見ると、10月は年少層と成人男性、11月は全階層で死亡者が減少したが、死亡者の実数に注目すると10月は同月の死亡者の18.4%にとどまる成人男性、11月は11.1%にとどまる成人女性の影響が大きかったことがわかる。

つづいて前節と同様に、年齢・性別ごとに月別分布を見ていきたい。まず15歳未満の年少層は1月、7月、12月に平均を超えたが、年間死亡者の33.9%が集中した12・1月に死亡者の山が形成された。7月にも死亡者は増加したが、年間を通して見れば死亡者全体の傾向と同じく、冬季集中型といえよう。その一方で5・6月に10.0%と死亡者は最少となった。

15歳以上の成人男性は、3月、5・6月、8・9月に平均を超え、5・6月が年間死亡者の23.8%、8・9月が21.0%を占めた。晩春から初秋にかけて死亡者が増加したといえる。そして死亡者全体と同じく、10・11月に10.5%と死亡者は最少となった。

成人女性は1月、3・4月、7・8月、10月、12月に平均を超えた。ただ、3・4月が年間死亡者の21.3%、12・1月が20.0%、7・8月が19.4%を占めており、死亡者が比較的分散しているところに特徴があった。また死亡者全体や成人男性と同じく、10・11月に11.9%と死亡者は最少となった。

ここまで年齢別・月別分布の諸点を明らかにしてきたが、広島藩領の平常年の死亡構造として、年少層が死亡者全体の約半分を占めたこと、冬季に死亡者の山が形成される冬季集中型であったこと、冬季における死亡者の増加はとくに年少層の影響が大きかったことを強調したい。

3) 平常年についての和歌山藩領と広島藩領の比較

和歌山藩領と広島藩領の平常年の死亡構造について、共通点と相違点を整理したい。まず共通点として1点指摘したい。それは死亡者の月別分布について、1月と7月に平均を超えて死亡者が増加したことである。ただし、以下で述べるように死亡者の山が形成される時期は異なった。

相違点については、4点認められる。第1に死亡者の年齢別分布、第2に15歳以上の

成人死亡者の性別分布、第3に死亡者の山が形成される時期、第4に死亡者が減少する時期である。これらの点について、順に見ていきたい。

まず死亡者の年齢別分布について、和歌山藩領では15歳未満の年少層が死亡者全体に占める割合が約3割であったのに対し、広島藩領では約5割に達した。この和歌山藩領の約3割という数値は、過去帳を利用した先行研究では一般的な水準といえる。しかし、実際よりも過少記載の傾向があると推定され¹⁹、広島藩領の水準が実態を反映しているとも考えられる。現時点でこれ以上追求することはできないが、この点が和歌山藩領と広島藩領の第1の相違点である²⁰。

成人死亡者の性別分布については、和歌山藩領では男女差がほとんどなかったのに対して、広島藩領では男性の占める割合がやや高かった。これが第2の相違点である。

つづいて死亡者の山が形成される時期であるが、和歌山藩領では7・8月、広島藩領では12・1月に形成された。そのため、和歌山藩領では死亡者は夏季集中型を示したのに対し、広島藩領は冬季集中型となった。この違いが第3の相違点である。

最後に死亡者が減少する時期について、和歌山藩領では2・3月という晩冬から初春に死亡者が減少したのに対し、広島藩領では10・11月という秋季に死亡者が減少した。これが第4の相違点である。

以上の4つの相違点を踏まえて、次のような点を強調しておきたい。死亡の季節性について、先に述べた粕山(1971)は、大正期には夏季と冬季の2つの死亡者の山があるが、より高かった夏季の山が次第に低くなり、冬季の山が目立つようになることを明らかにしている。これを前提として、鬼頭(1998)、同(2000)は宗門改帳や寺院過去帳を分析し、江戸後期の一般的な季節性は20世紀初頭のパターンに準じたとする。すなわち、7月を中心とする夏季に大きな山、12月を中心とする冬季に小さな山を持つ2山型であり、江戸後期には夏季の山がより強調されていたことを指摘している。上記の分析結果とこれらを比較すると、和歌山藩領も広島藩領も鬼頭の提示する季節型と一致せず、独自の季節型であったことがわかる。

また、15才以上の成人男性の死亡者が、和歌山藩領においても広島藩領においても8・9月に増加したことにも注目しておきたい。杉山(2015)ではこの傾向について、海に関連する生業に従事する者が多かったことが関係しているのではないかとの見解を示している。すなわち、夏場の漁猟による過酷な労働に加えて、商売・雇用の場で外来者と接触することにより感染症のリスクが高い状況に置かれることが多かったことを要因として同時期に死亡者が集中したのではないかということである。ほぼ同じ生業に携わっ

ている和歌山藩領でも同様の傾向が確認されたことは、この見解の妥当性を高めるものと考えられよう。

4. 高死亡年の死亡構造

1) 和歌山藩領の高死亡年

本章では前章で明らかにした平常年の死亡構造を踏まえて、和歌山藩領、広島藩領の順に高死亡年の死亡構造を明らかにする。しかし、多くの先行研究で見られるように、高死亡年を一括して分析を行う方法はとらない。死亡クライシスの様相は多様であり、高死亡年ごとに異なる死亡構造が見出されるためである。この傾向は広島藩領の高死亡年を分析した杉山（2005）によって明確になっている。

また、死亡構造の分析に際しては、その高死亡年特有の死亡構造を作り出した死亡実態の特徴を明らかにする必要がある。そのため、ここでは当該地域やその周辺に残る村方文書も利用しつつ、分析を進めていきたい。

では和歌山藩領について見ていくが、第2章で明らかにしたように、高死亡年は安政5年（1858）だけであった。同年の死亡者の年齢別分布は前章の表-2に示した。まず各階層が死亡者全体に占める割合を平常年と比較すると、15歳未満の年少層が18.4%減少、15歳以上の成人男性が17.2%増加、成人女性が1.2%増加であった。また、成人層の男女比を見ると、男性58.8%（57人）に対して女性41.2%（40人）であり、平常年と比較すると男性の占める割合が増加していた。平常年における1年あたり死亡者数を見ると年少層が16.9人、成人男性が16.6人、成人女性が17.2人であったので、同年の死亡者をこれと比較するとそれぞれ1.0倍、3.4倍、2.3倍となった。したがって、同年は成人層で死亡リスクが上昇したが、成人男性でとくに上昇したということがわかる。

同年の大量死亡については、塩津浦E寺の過去帳に「此年悪急病ニテ人多ク死ス、俗ニ言三日コロリト云」²¹とあることから、「三日コロリ」（コレラ）が大きく影響したと考えられる。

次に同年の死亡実態を月別分布から確認する。その死亡者の月別分布を示したのが表-6である。

同表から、8・9月に年間死亡者の66.7%が集中し、晩夏～初秋に死亡者の山が形成されたことがわかる。平常年と比較すると、死亡者の山の形成される時期が1ヶ月後ろへ移動した。大崎浦の安政5年（1858）「流行疫病相煩難洪奉歎願下調帳」²²の末尾には「奉歎願口上」という藩への歎願書の下書きがあり、そこには「当四月比ヨリ只今以流行之

表一 6 和歌山藩領における安政 5 年（1858）の死亡者の月別分布

	15歳未満		15歳以上				合計	
			男性		女性			
	人	%	人	%	人	%	人	%
1月	1	5.9	4	7.0	2	5.0	7	6.1
2月	1	5.9	2	3.5	0	0.0	3	2.6
3月	0	0.0	1	1.8	1	2.5	2	1.8
4月	0	0.0	0	0.0	2	5.0	2	1.8
5月	0	0.0	1	1.8	1	2.5	2	1.8
6月	5	29.4	4	7.0	2	5.0	11	9.6
7月	0	0.0	2	3.5	0	0.0	2	1.8
8月	3	17.6	16	28.1	7	17.5	26	22.8
9月	6	35.3	22	38.6	22	55.0	50	43.9
10月	0	0.0	4	7.0	1	2.5	5	4.4
11月	1	5.9	0	0.0	2	5.0	3	2.6
12月	0	0.0	1	1.8	0	0.0	1	0.9
合計	17	100.0	57	100.0	40	100.0	114	100.0

注：割合については、四捨五入により小数第 1 位までとした。そのため、内数の和は必ずしも合計とは一致しない。

疫病数多相煩」とある。したがって、コレラは春季から流行し始め、晩夏～初秋に死亡者を急増させたのであろう。

2) 広島藩領の高死亡年

次に広島藩領について、高死亡年の死亡構造を明らかにする。

その年齢別分布については前章の表 - 4 に示した。まずは死亡者指数が 2.81 に達し、広島藩領を襲った幕末最大の死亡クライシスである文久 2 年（1862）に注目する。各階層が死亡者全体に占める割合を平常年と比較すると、15歳未満の年少層が 6.3% 増加、15歳以上の成人男性が 6.9% 減少、成人女性が 0.7% 増加であった。また、成人層の男女比を見ると、男性 43.3%（39人）に対して女性 56.7%（51人）であり、平常年と比較すると女性の占める割合が増加していた。平常年における 1 年あたり死亡者数を見ると年少層が 33.6 人、成人男性が 15.1 人、成人女性が 13.7 人であったので、同年の死亡者をこれと比較するとそれぞれ 4.0 倍、2.6 倍、3.7 倍となった。したがって、同年は全階層で死亡リスクが上昇したが、年少層と成人女性でとくに上昇したということがわかる。

同年の大量死亡については、麻疹（はしか）とコレラ（暴吐瀉）の影響が考えられる。当該地域から直線距離で約 3 km の安芸郡では、同年に麻疹とコレラが流行し、死者が少なくなかったためである²³。感染力の強い麻疹やコレラが当該地域においても流行したと解釈できよう。

つづいて死亡者指数が1.90を記録した慶応元年（1865）を取り上げる。各階層が死亡者全体に占める割合を平常年と比較すると、15歳未満の年少層が23.9%増加、15歳以上の成人男性が16.4%減少、成人女性が7.5%減少であった。また、成人層の男女比を見ると、男性35.3%（12人）に対して女性64.7%（22人）であり、平常年と比較すると女性の占める割合が増加していた。同年の死亡者を平常年における1年あたり死亡者数と比較すると年少層が3.5倍、成人男性が0.8倍、成人女性1.6倍となった。したがって、同年は年少層と成人女性で死亡リスクが上昇したが、年少層でとくに上昇したということがわかる。

同年については大量死亡に影響を与えた具体的な病名を特定することはできないが、年少層と成人女性、とくに年少層に強い影響を与えるような感染症、たとえば天然痘（痘瘡）などが流行したと推定される。

次に各高死亡年の死亡実態を月別分布から確認する。文久2年（1862）の死亡者の月別分布を示したのが表-7である。

同表から、7月～閏8月が年間死亡者の58.9%を占め、夏季に死亡者の山が形成されたことがわかる。平常年に死亡者の山は12・1月に形成されており、大きく変化したといえる。前掲の文久2年（1862）「郡方御用跡控」に、「先頃已来麻疹流行いたし相煩候面々近々快方移り合……（中略）……夏より暴瀉ニ相成死失不少」との記載があることから、「麻疹」（はしか）とその後の「暴瀉」（コレラ）による死亡者が多数を占めたのであろう。

表-7 広島藩領における文久2年（1862）の死亡者の月別分布

	15歳未満		15歳以上				合計	
			男性		女性			
	人	%	人	%	人	%	人	%
1月	2	1.5	2	5.1	1	2.0	5	2.2
2月	1	0.7	1	2.6	5	9.8	7	3.1
3月	1	0.7	3	7.7	1	2.0	5	2.2
4月	5	3.7	1	2.6	3	5.9	9	4.0
5月	5	3.7	4	10.3	3	5.9	12	5.3
6月	7	5.1	4	10.3	3	5.9	14	6.2
7月	27	19.9	1	2.6	9	17.6	37	16.4
8月	44	32.4	6	15.4	14	27.5	64	28.3
閏8月	25	18.4	4	10.3	3	5.9	32	14.2
9月	7	5.1	4	10.3	1	2.0	12	5.3
10月	4	2.9	2	5.1	3	5.9	9	4.0
11月	6	4.4	5	12.8	4	7.8	15	6.6
12月	2	1.5	2	5.1	1	2.0	5	2.2
合計	136	100.0	39	100.0	51	100.0	226	100.0

注：割合については、四捨五入により小数第1位までとした。そのため、内数の和は必ずしも合計とは一致しない。

また、15歳未満の年少層と15歳以上の成人女性は、8月にそれぞれ年間死亡者の32.4%、27.5%が集中していた。ここからも、同年の麻疹とコレラは、年少層と成人女性に強く影響を及ぼしたことが明らかとなる。

つづいて慶応元年（1865）の死亡者の月別分布を示したのが表－8である。

同表から、9・10月に年間死亡者の56.2%が集中し、秋季に死亡者の山が形成されたことがわかる。同年も平常年と比較すると、死亡者の山が形成される時期は大きく異なった。そしてこの2ヶ月間の死亡者の87.2%が15歳未満の年少層で占められていた。ここからも同時期における年少層特有の感染症の拡大が推定できよう。

3) 高死亡年についての和歌山藩領と広島藩領の比較

和歌山藩領と広島藩領の高死亡年の死亡構造を明らかにしてきたが、本節ではそれらを比較したい。

和歌山藩領で唯一の死亡クライシスであった安政5年（1858）は、広島藩領では最も死亡者が少ない年次の1つであった。同年に流行したコレラは、長崎から東進北上して全国に流行したとされるが、広島藩領ではその影響が確認されないといえる。

広島藩領で最大の死亡クライシスであった文久2年（1862）は、和歌山藩領では中死亡年であったが、安政5年（1858）に次いで死亡者が多い年次であった。和歌山藩領の

表－8 広島藩領における慶応元年（1865）の死亡者の月別分布

	15歳未満		15歳以上				合計	
			男性		女性			
	人	%	人	%	人	%	人	%
1月	3	2.5	0	0.0	0	0.0	3	2.0
2月	3	2.5	0	0.0	0	0.0	3	2.0
3月	3	2.5	1	8.3	0	0.0	4	2.6
4月	3	2.5	1	8.3	0	0.0	4	2.6
5月	3	2.5	1	8.3	0	0.0	4	2.6
閏5月	2	1.7	0	0.0	2	9.1	4	2.6
6月	0	0.0	1	8.3	4	18.2	5	3.3
7月	5	4.2	3	25.0	4	18.2	12	7.8
8月	9	7.6	1	8.3	2	9.1	12	7.8
9月	38	31.9	1	8.3	4	18.2	43	28.1
10月	37	31.1	0	0.0	6	27.3	43	28.1
11月	10	8.4	1	8.3	0	0.0	11	7.2
12月	3	2.5	2	16.7	0	0.0	5	3.3
合計	119	100.0	12	100.0	22	100.0	153	100.0

注：割合については、四捨五入により小数第1位までとした。そのため、内数の和は必ずしも合計とは一致しない。

文久2年（1862）の死亡構造を簡単に見ておくと、各階層が死亡者全体に占める割合は15歳未満の年少層が36.0%（32人）、15歳以上の成人男性が32.6%（29人）、成人女性が31.5%（28人）で、死亡リスクの上昇に大きな違いはない。月別分布については、7月～閏8月が年間死亡者の49.4%を占め、夏季に死亡者の山が形成されている。同年の死亡者増加の要因について現時点では不明であるが、当該地域に近い和歌山城下では、麻疹とコレラが流行していた²⁴。

同年は広島藩領においてのみ死亡クライシスが発生したことから、広島藩領の方が和歌山藩領より死亡リスクが上昇したと考えられるが、その他にも死亡構造の比較から3点指摘したい。第1に死亡者の増加は共に麻疹とコレラの流行によるものであったこと、第2に死亡者は共に7月～閏8月という夏季に増加したこと、第3に死亡リスクの上昇を階層別に見ると広島藩領では年少層と成人女性でとくに上昇したのに対して、和歌山藩領ではいずれの階層もほぼ同程度上昇したことである。ここから、同年夏季は瀬戸内沿岸部から紀伊沿岸部にかけての広い範囲で、麻疹とコレラの流行による死亡者の増加があったことが推測される。

5. おわりに

本稿は、和歌山藩領と広島藩領の沿岸部を事例に、死亡構造上に見られる地域差を明確にし、それらを生み出す諸要因を考察することが課題であった。本稿のおわりにあたり、主要な分析結果をあらためて整理しておく。

まず、和歌山藩領と広島藩領に共通する傾向として、次の3点があげられる。第1に数年間隔での死亡者の急増、すなわち多くの先行研究でいわれた「死亡数の鋸歯状の大きな変動」が見られること、第2に平常年に死亡者は旧暦の1月と7月に増加すること、第3に平常年に15歳以上の成人男性の死亡者は8・9月という晩夏から初秋に増加することである。

これらの点について、農業を主な産業としていた両藩領の内陸部と比較すると、「死亡数の鋸歯状の大きな変動」は双方の内陸部において、1月と7月における死亡者の増加は和歌山藩領の内陸部において確認されるのに対し、8・9月における成人男性の死亡者の増加はいずれの内陸部でも確認されない²⁵。つまり、この傾向は沿岸部独自の特質といえるようである。これについて本稿では、当該地域の人々が海に関連する生業に従事していたことが影響したのではないかと仮説的に解釈しておいた。同一の地理的・経済的条件を有する沿岸部を対象に、死亡構造の地域間比較を行った結果として、平常

年において成人男性死亡者は晩夏から初秋に増加するという傾向を、海に関わる生業に携わる村々に共通する固有の特質として指摘しておきたい。

次に和歌山藩領と広島藩領で異なる傾向として、次の3点をあげたい。第1に平常年を大幅に上回る死亡者の発生、すなわち大量死亡＝死亡クライシスの発生を見たとき、その回数は和歌山藩領より広島藩領の方が多かったこと、第2に平常年において死亡者全体に占める15歳未満の年少死亡者を見たとき、その割合が和歌山藩領より広島藩領の方が多かったこと、第3に平常年における死亡者の月別分布の傾向、つまり季節性について、和歌山藩領では夏季集中型であったのに対し、広島藩領では冬季集中型であったことである。

とくに死亡クライシスの発生回数については付言しておきたい。江戸後期のなかでも本稿で取り上げた幕末期は、死亡者の急増傾向が顕著な時期であり、両地域間で確かめたこの異なる傾向について、若干の考察を加えておく必要がある。

死亡構造上に見られる地域差の形成要因については、各地域の経済発展差、具体的には地域住民の経済的な分化状況等の影響が考えられよう。和歌山藩領と広島藩領は家屋が密集するという居住環境、雑業層が地域住民の大多数を占めるという経済的分化状況、雑業の主なものが漁業や廻船業に関連する生業であった等の諸条件は共通していた。したがって、仮説的に死亡クライシス＝大量死亡の発生に影響した要因は、隣接・周辺地域への移動・接触機会の濃度の差であったと解釈しておきたい。和歌山藩領より広島藩領の方が、隣接・周辺地域への移動・接触機会が濃密で、死亡リスクも高まりやすかったのではないだろうか。

死亡構造上に見られる地域差の具体的実態について、分析事例は限られている。地域差の形成要因を追求するためには、各地での事例研究を積み重ねる必要がある。今後も筆者達の研究を継続したい。

注

- 1 代表的なものとして高木（1996）、鬼頭（2000）、木下（2002）などがある。
- 2 杉山（2004）、杉山（2005）、阿部・杉山（2005）、阿部・杉山（2006）、杉山（2011）、池本（2014）、杉山（2015）、池本（2016）など。
- 3 和歌山藩領沿岸部を事例とした速水（2009）、池本（2016）、広島藩領沿岸部を事例とした溝口（2008）、杉山（2015）、長崎の幕領沿岸部を事例とした中島（2016）などがあるだけである。

- 4 和歌山藩領における浦方とは、加子米を負担し、藩から漁業権を認められた村を指す（和歌山県史編さん委員会（1990））。
- 5 仁井田（1990、427・543-544頁）。名草郡・海部郡・伊都郡を含む紀北四郡の分は文化12年（1815）に完成したとされる（和歌山県史編さん委員会（1990））。
- 6 「和歌山縣史料 十九」。史料上では3,294人となるが、これは文化期には除かれた8歳未満層を含む。近隣の事例から、ここでは全人口に占める8歳未満人口の割合を14%と仮定した。
- 7 天保5年（1834）「紀伊国郷帳」（和歌山県史編さん委員会（1977、32-69頁所収））。
- 8 文政2年（1819）「阿賀村国郡志御用書上帳」（呉市史編纂委員会（1999、341-387頁所収））。
- 9 下津町史編集委員会（1974、683頁所収）。作成年代は干支や庄屋・肝煎などから推定した。
- 10 下津町史編集委員会（1976、575頁）。
- 11 共に寛政6年（1794）「諸用控」（下津町史編集委員会（1974、386-437頁所収））収載。なお、翻刻時に読点は付されているが、適宜読点を付け直している。以下も同様である。
- 12 過去帳はいずれも各寺院で所蔵されているものである。なお、和歌山藩領の史料利用にあたっては、海南市冷水A寺、海南市下津町塩津B寺、E寺、海南市下津町大崎C寺、海南市教育委員会の方々非常に世話になった。ここに感謝したい。また、史料収集にあたっては、JSPS 科研費262765、公益財団法人松下幸之助記念財団の助成を受けた。
- 13 広島県呉市入船山記念館に寄託中の宮尾家文書から、「第壱号 過去帳」および「第貳号 仮過去帳」を利用した。檀家総代であった宮尾家が檀家の状況を把握するため、本来の過去帳を写したと考えられる。なお、広島藩領の史料利用にあたっては、広島県呉市入船山記念館ならびに同市文化スポーツ部文化振興課の協力を得た。とくに記して感謝する次第である。
- 14 戸主名に続いて「子」・「孫」・「倅」・「娘」と記載されている場合は未婚者にとらえ、15歳未満と仮定した。
- 15 鬼頭（2000、158頁）。
- 16 死亡者指数の呼称・算出方法は杉山（2004）を参照した。
- 17 新暦への換算は、旧暦に1ヶ月を加算する簡易な方法をとった。

- 18 史料の都合上、B寺のみ閏月も含んでいる。
- 19 こうした年少層の過少記載の傾向は、過去帳を利用した死亡研究における注意点である。なお、先行研究には過去帳の記載状況について、死亡者全体に占める10歳未満の死亡者の割合がその正確さの指標となりうるという指摘もある（市川・豊川・吉田（1983））。
- 20 死亡者全体に占める年少層の割合の違いは、本稿で対象とした沿岸部にとどまるものではない。内陸部について見ると、和歌山藩領では約3割（池本（2014））、広島藩領では約6割（杉山（2004））、ただしこれは本稿と異なり10歳未満層が死亡者全体に占める割合である）であり、より一般的な意味で和歌山藩領と広島藩領の相違点として指摘できる。
- 21 これは明治6年（1873）にE寺住職となった者による記述であるが、同年は安政5年（1858）から15年しか経っておらず、実際にコレラ流行を体験した人々から聞いた話と考えられることから、内容の信憑性は高いと判断した。なお、本稿で利用したA寺、C寺とこのE寺（塩津浦の約4割を檀家とする）のデータを用いた分析では、同年における成人層の死亡リスク上昇に関して、男女差はほとんどないという結果であったことを付記しておく（池本（2016））。
- 22 大崎区有文書。
- 23 文久2年（1862）「郡方御用跡控」（澤原梧郎氏文書、広島県呉市文化スポーツ部文化振興課提供）には、安芸郡番組から割庄屋へ宛てた通達があり、そこには「流行病二而郡中村々之内ニハ家内煩ひ多く又ハ過半死失或者老人小兒而已相残係るへき親類も無之」と記されている。
- 24 ただし、死亡者の増加はコレラよりも麻疹の流行による影響が大きかったとされる（和歌山市（1915））。
- 25 和歌山藩領については池本（2014）、広島藩領については杉山（2004）参照。

参考文献

- 阿部英樹・杉山聖子「1寺院の過去帳からみた在郷町の死亡構造－出羽国田川郡大山村の事例－」『中京大学経済学論叢』第16号、2005年、55-79頁。
- 阿部英樹・杉山聖子「寺院過去帳による死亡構造の長期的分析 広島県東広島市森近地区の1寺院過去帳を事例として－1810（文化7）年～1999（平成11）年－」『中京大学経済学論叢』第17号、2006年、15-33頁。

- 池本裕行「経済的先進地における天保クライシスの実態と特質－紀州藩領を事例として－」『農業史研究』第48号、2014年、57-69頁。
- 池本裕行「和歌山藩領における歴史災害の実態－沿岸部を事例として－」『和歌山地方史研究』第71号、2016年、37-50頁。
- 市川雅教・豊川裕之・吉田節子「過去帳による地域集団の健康水準の評価」『民族衛生』第49巻第4号、1983年、199-209頁。
- 鬼頭宏「もう1つの人口転換－死亡の季節性における近世的形態の出現と消滅－」『上智経済論集』第44巻第1号、1998年、11-34頁。
- 鬼頭宏『人口から読む日本の歴史』講談社、2000年。
- 木下太志『近代化以前の日本の人口と家族－失われた世界からの手紙－』ミネルヴァ書房、2002年。
- 呉市史編纂委員会編『呉市史 近世2』呉市役所、1999年。
- 下津町史編集委員会編『下津町史 史料編・下』下津町、1974年。
- 下津町史編集委員会編『下津町史 通史編』下津町、1976年。
- 杉山聖子「近世後期から昭和戦前期の瀬戸内農村における死亡構造の時系列的分析－広島県賀茂郡中黒瀬村の寺院過去帳を事例として－」『農業史研究』第38号、2004年、38-48頁。
- 杉山聖子「近世瀬戸内農村における死亡クライシスの実態－広島藩領・安芸国賀茂郡黒瀬組の1寺院過去帳を分析事例として－」『政治と経済』第188号、2005年、1-16頁。
- 杉山聖子「近世農民層の死亡構造と社会経済階層との関係」『中京大学経済学論叢』第22号、2011年、1-19頁。
- 杉山聖子「幕末・明治初年の瀬戸内沿岸部における死亡構造の特質－入船山記念館寄託の寺院関係文書を材料として－」『呉市海事歴史科学館研究紀要』第9号、2015年、56-70頁。
- 高木正朗「19世紀東北日本の「死亡危機」と出生力」『社会経済史学』第61巻第5号、1996年、1-32頁。
- 中島満大『近世西南海村の家族と地域性－歴史人口学から近代のはじまりを問う－』ミネルヴァ書房、2016年。
- 仁井田好古編『紀伊続風土記 第1輯』臨川書店、1990年。
- 速水融『歴史人口学研究 新しい近世日本像』藤原書店、2009年。
- 溝口常俊「近世因島の過去帳」『名古屋大学附属図書館研究年報』第6号、2008年、

1-20頁。

榎山政子『疾病と地域・季節』大明堂、1971年。

和歌山県史編さん委員会編『和歌山県史 近世』和歌山県、1990年。

和歌山県史編さん委員会編『和歌山県史 近世史料1』和歌山県史編さん委員会、1977年。

和歌山市編『和歌山史要』和歌山市、1915年。